

認知症を治すケイシー療法

食事療法と心身の歪みを正すことが予防の基本
暗示療法とインピーダンス装置が治療の基本

Sample

第 21 号の内容

- 認知症の現状
- ケイシー療法によって認知症を克服した人々
- ケイシー療法による認知症の予防と治療
- 記憶力の鍛え方（ケイシー流コグニサイズ）
- リーディング資料

編集・発行 NPO 法人日本エドガー・ケイシーセンター

はじめに

2013 年、厚労省研究班は 65 才以上の高齢者のうち認知症を患う人の数が推計で 15 %、2012 年時点で 462 万人に達し、軽度認知障害と呼ばれる予備軍がさらに 400 万人程度になるという調査結果を初めて示しました。65 才以上の 7 人に 1 人が認知症とされます。しかも高齢者の認知症有病率は年々高まっており、このままのペースで行けば、30 年後には約 1,000 万人が認知症になり、高齢者の 4 人に 1 人の割合に達するとされます。

一方で、認知症に対する予防や治療、認知症に対する社会制度は非常に遅れており、ひとたび家族に認知症が出ると、その家族は経済的にも肉体的、精神的にもとても大きな負担を強いられます。認知症の親の介護をするために会社を辞めたり、それまでのフルタイムの仕事からパートタイムの仕事に切り替えるといったことも珍しい話ではありません。当然ながら収入は大幅に減少し、そこに日に日に認知症の進む家族の面影をみなければならぬ。さまざまな苦悩が次々と押し寄せてきます。

医療に限って見ても、現時点で認知症に対する治療法としては、軽度なものに限り、投薬あるいは運動療法などによって病状の進行を半年から数年遅らせることができるだけで、認知症の人を健康な状態に回復させることは不可能であると考えられています。

このような深刻な状態でありながら、ありがたいことに、エドガー・ケイシーのリーディングには、認知症に対する具体的な治療法がいくつも残されています。認知症を発症するメカニズムについても研究の手がかりとなる示唆を多数与えています。そして何よりも、（アルツハイマー型を含む）認知症を患っていた人々がこの治療法を実践することで、現実に認知症が治っているのです！軽度の認知症はもとより、相当に進行した認知症まで治っているのです！これは驚くべきことであります。

エドガー・ケイシーは、人間の神経細胞も、適切な方法で刺激するなら再生賦活するということを今から百年も前から主張し、実際、そのために必要な一連の方法と特殊な装置の作り方をわれわれに示しました。

原理の説明は本文に譲りますが、認知症に対するケイシー療法の原理は現代の生物学的常識や物理学的な常識と一致しないところがあります。しかしケイシーの残した方法で治療している事実が、ケイシーの主張の正しさを証明していると私は考えます。

そして何よりも、私達は認知症に関してもはや議論している余裕はないのです。このレポートによってケイシー療法による認知症の治療法を納得されたなら、認知症を患う方、

身近に認知症の人をかかえる方々はぜひ試してみてください。また、健康な人も今のうちから認知症予防に役立つことを各自の人生に取り入れて下さい。それによってきっと生きる希望と喜びが回復されることと信じます。

なお、ケイシー療法によるアルツハイマーを含む認知症の治療に関しては A.R.E. のデビッド・マクミラン氏 (David McMillin) による下記の優れた著書があります。さらなる研究を求められる方は同氏の著書に取り組まれることをお勧めします。(書籍としては絶版になっていますが、電子ブックとして同氏のサイト^{*1} から購入可能です。)

- Alzheimer's Disease & The Dementias by David McMillin, M.A. (A.R.E. Press) 1994 年
- Principles & Techniques of Nerve Regeneration by David McMillin, M.A. (A.R.E. Press) 1995 年

また、エドガー・ケイシーの食事療法を中心とした方法でアルツハイマーに取り組む参考図書としては下記のものがあります。

- Alzheimer's Disease – A Holistic Approach by Michelle Deetken, PhD (4th Dimension Press) 2013 年

認知症を患うすべての方々にエドガー・ケイシーの福音が届けられますことを、それによって生きる喜びと希望が大いに回復されますことを願っております。

2015 年 3 月 18 日

日本エドガー・ケイシーセンター

光田 秀

— 免責事項 —

このレポートで紹介しているケイシー療法は、あくまでエドガー・ケイシーが各依頼者に対して与えた情報をもとにまとめたものであり、また、このレポートはいかなる治癒を主張するものでもありません。ここで紹介する方法のいずれかを実行しようとする場合は、各自の責任と判断のもとに、しかるべき資格を有する医師あるいは医療従事者の監督の下に行ってください。

ここで紹介している方法を実行したことで如何なる不利益が生じたとしても、著者ならびに発行元である NPO 法人日本エドガー・ケイシーセンターは一切の責任を免れるものとします。

^{*1} <http://www.mcmillinmedia.com/catalog/catalog.html>

第1章

認知症の現状

ケイシー療法によって認知症の治療に取り組む上において、認知症の現状を知っておくことは有益であり、また、必要なことです。

ここでは、認知症とはいかなる疾病であるのか、また今後ますます高齢化の進む日本において、認知症がどれほど深刻な問題になろうとしているのか、そして、現代医学はこの疾病をどこまで解明し、どのような予防法、治療法が提供あるいは研究されているのか、これらのことをできるだけ最新の資料をもとに検討しておきたいと思います。

認知症とはどのような病気か

人は誰でも年をとれば脳の機能が衰え、年相応の「ボケ」がみられるようになります。これは自然な老化現象であり、視点を変えれば、肉体を脱いで霊的世界に戻るときの死に対する不安を軽減してくれる神の恩恵の一つともいえます。気性の激しかった人が高齢になって穏やかになって行くのも、脳が適度に老化してくれるお陰です。

一方で、自然な老化現象とは別のプロセスで脳に器質的な障害が生じ、脳の働きが著しく低下するのが認知症です。

かつてはこのような疾患を「痴呆症」と呼んでいましたが、2004年厚生労働省がこれらの疾患を「認知症」と言い改めることを定め、現在は認知症と呼ぶことになっています。

加齢による物忘れと認知症の違い

どちらも脳の働きが低下するという点では、加齢によるものと認知症によるものは似ていますが、実際には症状においても、進行の程度においても大きな差が出てきます。次の表は、加齢による物忘れと認知症の違いを示したものです。

	加齢による物忘れ（正常）	認知症
忘れ方	体験したことの一部を忘れる （例：食事で何を食べたか忘れる）	体験したことの全体を忘れる （例：食事したこと自体を忘れる）
自覚	物忘れをしている自覚がある （思い出そうとする）	物忘れをしている自覚がない
日常生活	支障はない	支障がある
進行	悪化はみられない	悪化して行く
その他の症状	なし	・ 判断能力の障害 （例：いつも同じ服を着る） ・ 遂行機能障害 （段取りよく物事を行えない） ・ 見当識障害 （時間、場所、人物などがわからなくなる）

認知症の種類

認知症にはいくつかの原因が知られていますが、その病態の違いから「脳血管の障害によって起きる「脳血管性認知症」と、脳の神経細胞の障害によって起きる「神経変性性認知症」の二つに大きく分けられます。^{*1}

神経変性性認知症はさらに障害の起る部位や発症のプロセスの違いから、「アルツハイマー型認知症」、「レビー小体型認知症」、「前頭側頭型認知症」にわけられ、同じ認知症でも障害される脳の部位の違いから、症状に違いが現れます。

このうち、高齢者の認知症の約7割を占めるのがアルツハイマー型認知症で、アルツハイマー型認知症は認知症の代名詞のようになっています。実際、今日の日本で急激に増えているのがこのアルツハイマー型認知症で、今後さらにアルツハイマー型認知症の割合は増えると予測されています。本稿でも特に断らない限り、認知症といえばアルツハイマー型認知症を指すものとします。

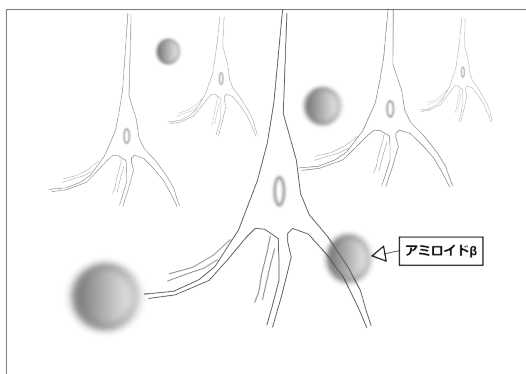
アルツハイマー型認知症とはどのような病気か

アルツハイマー型認知症の発生機序として、今日もっとも有力とされているのが「アミロイドβ（ベータ）・タウ仮説」です。

^{*1} その他に、外傷（硬膜下血腫など）、感染（神経梅毒、HIV 脳症など）、脳腫瘍、内分泌（甲状腺機能低下症）などに起因する認知症が知られている。これらは原疾患の治療により認知症が治る可能性がある。

ここではこのアミロイド β ・タウ仮説がどのようにアルツハイマー型認知症を説明しているのかを概観することにいたします。

認知症発症の20年も前からアミロイド β の蓄積が始まる

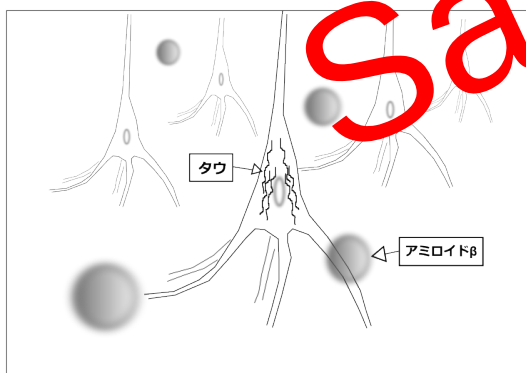


脳の中では、神経細胞の活動によって、老廃物としてアミロイド β と呼ばれる蛋白質が産生されます。健康な脳であれば、これらの老廃物は血管に回収され、脳はクリーンな状態に保たれます。

しかし、血液が汚れてくると脳内の老廃物（アミロイド β ）を回収することが難しくなり、神経細胞の外に徐々にアミロイド β が蓄積するようになります。

家族性アルツハイマーの研究から、アルツハイマー型認知症を発症する実に20年以上も前から、アミロイド β の蓄積が始まっていることがわかってきました。

アミロイド β の蓄積から10年経過した頃からタウが増大し始める



そして、脳内に蓄積し始めたアミロイド β が神経繊維を傷害することで、神経細胞内にタウと呼ばれる蛋白質が産生されるようになります。アミロイド β の蓄積から遅れること10年くらいから始まるとされます。

このタウ蛋白質が最終的に神経細胞を死に追いやる原因物質であるとされます。アミロイド β が認知症発症を境に徐々に減少するのに対し、タウ蛋白質は

発症後も増加し続けることがわかっています。

この原因物質が特に記憶を司る海馬に集まり、その神経細胞を破壊するため、タウの蓄積が始まる頃から海馬が萎縮を始めるようになります。

そして認知症発症の5年くらい前には既に海馬の萎縮は相当進んでおり、軽度認知障害（MCI）が見られるようになります。